

雑誌『日本のなかの朝鮮文化』とその時代：1970年代日本の「韓国・朝鮮観」をめぐる試論

山口，祐香
日本学術振興会：特別研究員

<https://hdl.handle.net/2324/7432741>

出版情報：韓国研究センター年報. 25, pp.85-97, 2025-03-21. 九州大学韓国研究センター
バージョン：
権利関係：



雑誌『日本のなかの朝鮮文化』とその時代：

1970年代日本の「韓国・朝鮮観」をめぐる試論

山口 祐 香*

はじめに

本稿は、戦後日本の市民社会で「朝鮮」¹⁾はいかにイメージされてきたかという問いを、同時代のメディアや市民の実践から跡付けるものである。その手がかりとして、1970年代を通じて京都で刊行された季刊雑誌『日本のなかの朝鮮文化』と、それに携わった在日朝鮮人および日本人の言説や実践を取り上げる。

2025年は日本と韓国の国交正常化から60周年を迎える。35年間に渡る日本による朝鮮半島の植民地支配や解放、その後の冷戦期における南北分断などを経る中で、日本人が隣国に向けるまなざしも変化を見せて来た。戦後日本人の隣国観の変遷について、ターニングポイントとしてよく挙げられるのが、韓国の民主化とそれを契機とする1980年代後半以降の直接交流の拡大である。逆に言えば、民主化以前の1970年代までは、東アジアの冷戦構造における国家間関係や国内政治の状況が強い影響を持ち、国交は回復したとは言え、メディア報道や直接交流が著しく限定されていた上、戦前から続く植民者としての日本人の朝鮮半島に対する優越感や無関心や、国内の在日朝鮮人²⁾に対する民族差別も相まって、

日本人の隣国観は概ね否定的で偏ったものであったとして理解されてきた。

ただし、直接交流が困難であった時期にあっても、朝鮮半島で起こる出来事や人々の状況に対する日本人の関心が皆無だった訳ではない。1960年代後半の世界的な「政治の季節」の高まりに呼応し、日本でも若い世代を中心とする反戦運動や平和運動が盛んに行われた。続く1970年代にかけては、高度経済成長がもたらす豊かさが社会に浸透する中で、それまで関心を寄せて来なかった国内のマイノリティや、アジアを始め他の国・地域の人々が置かれた現状に連帯し、日本人である自身の生き方を問い直そうとする市民運動が立ち上がってくる。とりわけ、一部の日本の知識人や文化人、学生運動の活動家、在日朝鮮人たちは、かつての植民地であり、当時軍事独裁政権下で展開された韓国の民主化運動への連帯を掲げ、戦前・戦後の日本のあり方を問おうとする越境的な「日韓連帯運動」を展開した³⁾。特に近年は、この日韓連帯運動について、実際に運動に携わった人々の証言記録に留まらず、トランスナショナルな市民的公共圏が展開した社会運動の経験として捉え直し、その言説や行動メカニズムの検証を通じて、民主化以降の日韓の市民社会の協力や交流との関連を探ろうとする研究が盛んに出てきている。

あるいは、国内の在日朝鮮人コミュニティにおいても、日本で生まれ育った2世以降の世代が台頭し、1970年の日立就職差別事件を皮切りにするこうした

* 日本学術振興会特別研究員 PD

1) 本稿では、朝鮮半島全体を地域として指す語として「朝鮮」を使用し、朝鮮由来の言語や文化は「朝鮮語」「朝鮮文化」などと表記する。また、「大韓民国」および「朝鮮民主主義人民共和国」については、それぞれ「韓国」「北朝鮮」という略称を用いる。

2) 在日朝鮮人とは、日本の韓国併合を背景に渡日した朝鮮人およびその子孫たちを指し、韓国・朝鮮籍、日本籍、その他の国籍に関わらず「在日朝鮮人」として表記する。

3) 李美淑『「日韓連帯運動」の時代——1970-80年代のトランスナショナルな公共圏とメディア』東京大学出版会、2018年、2頁。

在日朝鮮人への民族差別撤廃運動は、多くの日本人支援者たちも巻き込みながら全国規模で展開していった。

このように、多くの日本人にとって朝鮮半島は文字通り「近くて遠い国」であった1970年代においても、隣国の情勢に関心を寄せ、あるいは地域の中の民族差別に問題意識を持ち、連帯する人々は確かに存在した。こうした動きへの背景には、困難な状況に生きる人々への直接的な同情や共感のみならず、南北に分断された朝鮮半島の社会状況や、多くの朝鮮半島出身者が戦前から来日し、現在も日本国内で民族差別による生きづらさを強いられている現状そのものが、日本の植民地支配の問題と地続きのものとして受け止めようとする人々の問題意識が存在したと言える。

その中で、本稿の主題である雑誌『日本のなかの朝鮮文化』（以下、『朝鮮文化』）が京都在住の在日朝鮮人実業家である鄭詔文（1981-89）らによって創刊されたのは1969年3月である。それまで朝鮮半島に関わる政治・社会・文化・歴史などに関する情報を得る機会が希少であった日本国内だが、1970年代以降は、農業経済学者で京都府平連の代表でもあった飯沼二郎の個人雑誌『朝鮮人』（1969年創刊）や、在日朝鮮人知識人たちが編集部を務めた総合雑誌『季刊三千里』（1974年創刊）などが刊行され、著名な日本人知識人たちも執筆者として加わった他、各地の市民運動の中で編まれたミニコミ誌などが盛んに作られていった。

それらの中で『朝鮮文化』は、いち早く「朝鮮」の語を冠し刊行された日本語雑誌であるのみならず、古代史に特化したことでよく知られている。同誌は、鄭詔文やその兄で作家の鄭貴文（1916-86）、同じく作家の金達寿（1920-97）らが中心となって刊行したが、司馬遼太郎や古代史研究者の上田正昭を始め、多くの日本人知識人や郷土史家たちが執筆者として名を連ね、高い評価を得ていた。隣国に対する日本社会のまなざしが無関心や偏見に満ちていた一方、近代日朝関係への反省や現代の朝鮮半島情勢への連帯に向けた声が挙げられつつあった同時代において、なぜ国家成立より遙か以前の「古代」に関心が寄せ

られたのか。また、人々は古代史を通じて日本と朝鮮半島の関係をいかに語り直そうとしたのか。本稿の主な問いはこの点にある。

なお、『朝鮮文化』の刊行背景や内容については、金達寿の来歴や作品に関する総合的研究を行った文学研究者の廣瀬陽一によって分析されたものがほぼ唯一の先行研究として存在している⁴⁾。ただし、廣瀬の研究はあくまで金達寿のライフワークであった古代史研究と『朝鮮文化』の関わりという観点から取り上げたものであり、同じく編集部を務めた鄭貴文・詔文兄弟や、日本人執筆者たちと雑誌の関わりや言説についてはまだ十分に検討されていない。以上の問題意識を踏まえ、ひとまず本稿では、まず鄭詔文らのライフヒストリーを中心に雑誌の刊行経緯を述べた上で、雑誌の記事や読者投稿欄を基に、日本人執筆者や読者の言説について整理し、今後の更なる研究に向けた課題を考えてみたい。

1 鄭兄弟の生い立ちと古代史との出会い

1918年に慶尚北道で生まれた鄭詔文は、両親と祖母、2歳上の兄・貴文と共に1925年に渡日し、知人の伝手を頼って京都府愛宕郡鷹峯村木ノ畑（現在の京都市北区鷹ヶ峰町）の長屋に住んだ。両親は西陣織の織工となり、兄弟は丁稚奉公をしながら貧しい生活を送る。10歳の時に詔文は楽只尋常小学校4年に編入し、人生で3年だけの学校生活送ったが、この頃の経験について鄭は、自身のアイデンティティの葛藤や歴史に関心を持った契機として言及している。

しかし歴史の時間ほどつらかったものはなかった。神功皇后の新羅征伐、秀吉の朝鮮征伐そして朝鮮併合……。歴史の世界では、朝鮮がいつも負ける側に立たされていた。しかもその「弱虫朝鮮」史観は現実生きる私たちをも「鮮人」「きたないヨボ」などと蔑んできたのである。授業が終わ

4) 金達寿の古代史研究に関する廣瀬陽一の著作としては、『金達寿とその時代 文学・古代史・国家』（クレイン、2016年）、『日本のなかの朝鮮 金達寿伝』（クレイン、2019年）を参照。

ると大勢の悪童に、朝鮮征伐だと囃し立てられ、石を投げられたり殴られたりしたものだ。よく大喧嘩したがその彼らとも親友となり、今ではたまに集まる同窓会での思い出話のひとつとなっている。その頃から私の心には日本の歴史に対する素朴な疑問の芽が出始めていた。——どうしてわが朝鮮はいつも弱いのだろうか？——そんな単純な思いが日本と朝鮮との関係史に興味をもつ原点になったといえる。⁵⁾

だが、戦時色が強くなる時代下で、1937年に発令された「奢侈禁止令」によって西新織産業が打撃を受け、鄭一家も失業したことで進学はできなくなり、再び港や軍需工場の労働者として働きながら終戦を迎えた。その上、先に朝鮮へ戻った父・鎮国が急死したことで一家は祖国に戻る術を失い、「ドタンと尻もちをついて居坐ってしまった」⁶⁾ まま、在日朝鮮人として日本在住を余儀なくされることとなった。

それでも、植民地解放に沸く終戦直後の熱気の中で、日本国内に居住していた朝鮮人たちは、失業者対策や生命財産の保護、帰国後の祖国での国家建設や新しい生活に向けて朝鮮語や文化等を教える民族学校の建設など、直面した様々な問題の解決と朝鮮人としての主体性回復に向けた組織づくりを進め、1945年10月に在日本朝鮮人聯盟（朝聯）が結成された。鄭詔文らも朝聯の活動に参加し、朝鮮学校設立の支援に熱心に取り組んだ。

ところが、1948年に朝鮮半島の南北分断が起こると、米軍占領期の日本では、日本共産党と結びつきを強めていた朝聯の活動に対し、GHQ と日本政府が警戒感を募らせていった。1947年5月2日に大日本帝国憲法下の最後の勅令として「外国人登録令」が發布され、日本在住の朝鮮戸籍登録者は日本国籍とは別に「朝鮮」国籍を持つものとして定義され、14歳以上の者に外国人登録証の常時携帯が義務付け

られた。

また同年、GHQ から指令を受けた日本政府が1948年に文部省が民族学校の閉鎖と朝鮮人生徒の日本人学校への編入を命じる「朝鮮学校閉鎖令」を通達したことで、朝聯を中心に大きな反対運動が起こった。1948年4月には阪神教育事件が勃発し、民族学校閉鎖反対運動が大阪や神戸で激しく展開される中で、4月26日には大阪府庁前に座り込んだ朝鮮人の集団に警官側が発砲し、16歳の少年が死亡するという事態が発生した。鄭詔文は4月26日の座り込みに参加し、近所の顔見知りであった少年が目の前で射殺される瞬間に遭遇した⁷⁾。更に1949年9月8日に朝聯も解散させられ、「世の中がわからなくなり一種の痴呆状態」⁸⁾ になった鄭詔文は放浪の旅に出してしまうこととなった。

朝鮮戦争が始まる頃、京都に戻りパチンコ店等の経営で財を成した鄭詔文は、37歳の時に京都市内の骨董店で見た李朝白磁の壺に心惹かれ、朝鮮由来の古美術品の収集を始める。その行動について、兄の鄭貴文は、単なる骨董趣味の域を超えた「彼自身の自己回復の手だて」⁹⁾ であったと説明している。民藝運動を主導した思想家の柳宗悦を尊敬し、朝鮮半島由来と聞けばあらゆる品を求めたと言われる鄭詔文だが、帰国がほぼ絶望的となった朝鮮の風土や記憶を想起すると共に、故郷を失った在日朝鮮人としての自身の境遇を重ね合わせる行為であったことが推察される。更には、社会情勢の中で在日朝鮮人をめぐる境遇も目まぐるしく変化する経験をした詔文にとって、長い年月を経ても日本人に珍重される古美術品の不変の価値は重大な意味を持ったと考えられる。

一方、鄭貴文は文学を志し、後に『故国祖国』や『わがナグネ』（創生社、1983年）などの作品を発表した。東大阪市に住んでいた1960年代当時は、東大阪文学会の中心柱であり、また、東京で金達寿ら始め在日朝鮮人文学者たちと62年に同人誌『朝陽』の

5) 鄭詔文「『日本のなかの朝鮮文化』覚書」『歴史と人物』通巻152号、中央公論社、1983年、29-39頁。

6) 飯沼二郎編『在日朝鮮人を語る 1 七十万の軌跡』、麦秋社、1984年、92頁。

7) 飯沼二郎編、前掲書、93頁。

8) 同上。

9) 鄭貴文『日本のなかの朝鮮民芸美』、朝鮮文化社、1987年、187頁。

刊行を行うなどの活動を行っていた。1968年に発生した金嬉老事件に際して、鄭貴文と金達寿は弁護側証人として法廷にも出席している。

更にこの頃から、鄭兄弟と金達寿は日本各地に残る朝鮮系の寺社仏閣や遺跡を訪ねる旅に頻繁に行き始めた。この旅は、幼少期から育った京都で身近に接した八坂神社や伏見稲荷大社など、日本人の精神的土壌とされてきた日本の様々な寺社仏閣や遺跡と古代朝鮮からの渡来系氏族との関係性を深い驚きでもって気づかせるものであった。

こうした個人の旅を通じて問題化されたのが、彼ら自身も学校で学び、一般社会にも定着している日本古代史の知識と、そこに描かれない、実際に旅の過程で目にした古代日本と朝鮮の深い関係性を示す様々な歴史的痕跡との差異である。そしてその象徴的なキーワードとなったのが当時の「帰化人」を巡る論争である。

「帰化人」は、古代に朝鮮や中国などの大陸から日本列島に移住してきた人々とその子孫を指す用語として広く用いられてきた。一方で、元来「帰化」とは、中国皇帝の王化を慕う周辺の異民族が帰順し、その国家的秩序に従うという中華思想に基づく語であったものを、7世紀末に成立した日本の律令国家が中国の国家制度を受容する中で、それ以前に海外から日本へ移住してきた人々を天皇の徳を慕って「帰化」したものともみなしたが、国家成立以前の渡来者まで含める歴史用語としては適当ではないとされる。更に、明治時代以降は「帰化人」が「日本人とは異なる特殊な存在」といった蔑視的な語感を持つようになり、古代の大陸出身者を、「帰化人」とみる歴史観は、日本の植民地支配や被支配民族への抑圧を歴史的にさかのぼることで正当化する誤った語であるとの批判もある¹⁰⁾。

こうした「帰化人」を巡る従来の歴史認識について、異を唱えたのが古代史研究者の上田正昭である。東アジア的視野からの古代史研究を提唱し、在日朝鮮人問題や被差別部落問題にも強い関心を持っていた上田は、1965年に『帰化人——古代国家の成立を

めぐって』（中央公論社）を発表し、大きな反響を得た。同書では、「日本人の一部にはいまだに『帰化人』を特殊視したり、あるいは極端に差別されていたかのように考えたりしている人々がある。しかし、そのような見方は不当な認識にもとづくものであり、民族差別を合理化する結果になる。こういう考えは、古代の支配者層がいだいていた蕃国の観念や近代日本の為政者らがつくりだした民族的偏見にわざわざされているものである」¹¹⁾として、古代東アジアの対外関係と日本、大陸の先進技術や仏教の伝来、古代国家における渡来系氏族の影響などといった観点から、通念としての「帰化人」観を再検討するべきであると主張した。鄭兄弟と金達寿は、1965年に当時立命館大学文学部の非常勤講師として日本史夏季講座を受け持っていた上田の講義を聞きに行き、67年に立命館大学で開かれた朝鮮史研究学会で上田と直接名刺交換したところから交友が始まった。

これらの旅と出会いの中からは日本人学者と共同で日朝関係史に関わる歴史雑誌を作る構想が生まれてくる。その構想は、当時鄭貴文の近所に住み、散歩仲間であった作家の司馬遼太郎にも相談される。1968年に薩摩焼の朝鮮人陶工をモデルにした短編小説『故郷忘れがたく候』を連載していた司馬も『帰化人』を読んでおり、鄭貴文に京都で会うべき知識人として上田正昭を勧めていた。

たしか六年前の春、近所を散歩しているときに、「こんなことをしていてもはじまらない」突如——私には——貴文氏が言い出した。こんなこと、とは散歩のことではなく、ご自分の人生についてである。貴文氏は、職業が制限されている在日朝鮮人として、他の多くの人々もそうであるように、喫茶店や遊戯場のようなものを、その当時経営しておられたのだが、それをいっそ整理したい、という。当時、貴文氏は五十二歳で、詔文氏は二歳下だった。兄弟で話し合われて、もう五十を越えたのだから金儲けよりももっと意味のあることを

10) 伊藤亜人ほか監修『韓国朝鮮を知る事典』、平凡社、2014年、416頁。

11) 上田正昭『帰化人』、中公新書、1965年、2頁。

しよう、ということになったのだそうである。貴文氏は歩きながら、「朝鮮と日本の関係は、古代では測り知れぬほど大きかったと思うのです。そういう主題で半学術雑誌のようなものを出すというのは、考えられないでしょうか」と、いわれた。話し方は相談のかたちだが、実際には決意をされていて、兄の貴文氏は商売をたたみ、弟の詔文氏はその雑誌の費用を出すという目的でさらに商売にはげむという。¹²⁾

この言葉通り、鄭詔文の自宅に「朝鮮文化社」が設立され、鄭詔文が発行人、鄭貴文が編集長、司馬遼太郎、上田正昭を顧問とし、実質的な編集者としての金達寿、編集補助として松本良子が携わり、『日本のなかの朝鮮文化』が創刊されることとなった。

ただし、金達寿と鄭兄弟の間では「古代史」をテーマにした雑誌を刊行する意図に微妙な差異が見られる。まず金達寿は、日本各地に残る「帰化人」由来の古代遺跡は、根本的に現代の朝鮮民族と関係ない「日本人の先祖」が残したものであるとみなした。それにも関わらず、近代以降の朝鮮蔑視観を内在化した日本人の大半は、古代の「帰化人」イメージと近現代の在日朝鮮人に対するイメージを混同している現状を金達寿は指摘し、「帰化人」に対する差別的なイメージは、むしろ日本人のルーツを否定する自己矛盾に他ならないと批判した¹³⁾。

一方で鄭兄弟は、「帰化人」の痕跡を物語る日本各地の史跡や、文化芸能の中に息づく朝鮮文化の存在が、現代の日本社会を生きる在日朝鮮人に民族的

な主体性の回復をもたらすものと考えた。たとえば、1973年に取材で訪れた共同通信社の記者に対し、鄭兄弟は以下のように語っている。

在日朝鮮人には、日本社会の中で、自分たちは“根なし草”だという意識が根強くあり、この意識をなんとか乗り越えたいと二人は熱く語った。朝鮮民族としての誇りを取り戻したいというのである。日本の歴史をさかのぼってみると各地に朝鮮由来の文化が根強く残っている。しかし、そのことは日本人にも在日の人にも知られていない。それらを再発見することで、在日朝鮮人が民族の誇りを取り戻し、日朝のお互いの文化を知り合い、対等で友好的な関係を構築したいという¹⁴⁾。

先に述べたように、朝鮮由来の古美術品の収集や遺跡めぐりは、彼ら自身にとって第一に「自己回復の手だて」であったが、『朝鮮文化』で広く社会に発信していくことは、他の在日朝鮮人にも同様の自己回復をもたらし、更には日本人にも歴史認識の変化を起こすことを期待していたことが分かる。依然として厳しい民族差別が残る日本社会において、一見無関係に見える古代史を主題としたこの雑誌の刊行は、そうした現状を変革する運動としては若干遠回りにも見える。だが、以下の随筆で述べているように、鄭貴文は遅々として好転しない現状の根底に、在日朝鮮人を差別する、あるいは全くの無関心の側にいる圧倒的多数の「普通の日本人」の存在を強く意識し、『朝鮮文化』の刊行を、従来の民族運動とは異なるアプローチから、日本人および日本社会と「対決」するための行為として位置づけるようになった経緯を述べている。そして、在日朝鮮人を取り巻く現代の問題と、古代の日朝関係を扱う雑誌は決してかけ離れたものでないと述べる。長いが、以下に一部を抜粋して引用する。

実のところ私は、「かくかくの如く在日朝鮮人は差別されている」とか「我々の人権は守られな

12) 司馬遼太郎『街道をゆく』7巻、朝日新聞社、1979年、

13) たとえば金達寿は日本人雑誌編集者との会談で次のように発言している。「と、いいますのは、そのいわゆる「帰化人」とは、これまでみてきたことでも明らかなように、あなた方日本人尾祖先ではあっても、ぼくとは直接何の関係もないわけです。なぜなら、ぼくは朝鮮で生まれ、そして数十年前にその朝鮮からやって来ている朝鮮人であって、そのいわゆる「帰化人」の子孫でも何でもありません。／しかしながら、日本人であるみなさんは、その「帰化人」の子孫であるかも知れないですから、蔑視のこもったその「帰化人」ということばを、もし怒るとすれば、それは日本人であるあなた方のほうでなくてはならない。」(金達寿「日本の古代史文化と『帰化人』」、江上波夫・金達寿・李進熙・上原和『倭から日本へ』、二月社、76-77頁)

14) 藤野雅之「鄭詔文さんと高麗美術館の思い出1」『高麗美術館報』102号、2015年、6頁。

ければならない」といった、このあからさまなスローガンを口にするのにあきがきているのだ。それを訴える熱量の何倍もの熱量を要する屈辱感が体内をひしめくからではない。それらの当然な要求なり訴えは、朝鮮人自身の口からも少なからずいわれてきたし、また書かれもしてきた。文学の領域においても描かれてきている。また日本人の口からも訴えられたし、少なからず書かれもしてきた。そうして戦後二十五年が経ったのである。戦前の三十六年を足すと丁度六十年ということになる。(中略)しかし、私たちの権利や主張等がかりに百パーセント通ったとしても、それは当然のことであつたにすぎなかったのである。その事由を述べる紙数はないがひとことでいえば、私たちは当然のことを主張しつづけてきたにすぎなかった。だから結局のところ今日まで、基本的なところではこれといって何一つ解決を見ていないといえる。一つの例を見よう。国籍の問題であるが、朝鮮という国籍をもっている場合、朝鮮の南北いづれへも、どのような事情によらず、日本の政府は旅行を認めていない、ということを日本人のほとんどが知らないのである。(中略)つまりところわれわれは、いい古されている言葉ではあっても、自己回復に向けて、それぞれが「名刺」をもたなければならない時期にきていると思う。それは「大多数の日本人」に「訴え」たり「理解してもらう」姿勢から、すばらしくて楽しい方法があれば、その方法で日本人と“対決”をせねばならない季節にきているとも思うのである。私たちが出している「日本のなかの朝鮮文化」もそういう意味で、さっきもいったように一つの「名刺」となることを願っている。¹⁵⁾

2 雑誌の構成について

『朝鮮文化』は毎号 B5版60ページ前後の誌面で構成された。内容としては、鄭詔文が収集した古美術

15) 鄭貴文「新しい『名刺』の一つとして——『日本のなかの朝鮮文化』のこと——」『文学』38 (11)、岩波書店、1970年、169-172頁。

品のグラビア、古代史・宗教史・美術史・哲学・文化人類学・地方史など、様々な領域から日本と朝鮮半島の関係を取り上げた論考やエッセイが掲載された。ただし、「非政治的であること」を原則とし、同時代の朝鮮半島情勢を含めた時事問題などは取り扱わなかった。

執筆者としては、林家辰三郎や井上秀雄、森浩一、飯沼二郎、鶴見俊輔、湯川秀樹といった関西の大学の研究者、松本清張や岡部伊都子、小松左京などの作家、公立学校の歴史科教員、学芸員、郷土史家、神社の宮司など、多様な人々が参加した。更に、広告を一切掲載せず、鄭詔文が全面的な経済支援を行う形で刊行された。部数は創刊当初は千部だったが、新聞各紙などでの紹介もあり、第40号の頃にはバックナンバーも含めて各号5千部刷る状況になっていた。

また、朝鮮文化社では関係者を集めた忘新年会や会食、花見の会などを定期的に開いており、寄稿者たちは時に家族も伴って集い親交を深めた。専門の違いから雑誌そのものにはほぼ参加しなかった在日朝鮮人歴史家の姜在彦も宴席に招かれ、司馬遼太郎と共に旅行するような親しい友人となるが、こうした余暇の時間の存在も相互の情報交換やネットワーキングにおいて重要な機会であったと考えられる。

執筆者について更に見ていくと、全50号に掲載された記事の執筆者224名中、在日朝鮮人はわずか5名(金達寿・鄭貴文・鄭詔文・姜在彦・李進熙)であることが分かる。この人選に関しては、鄭貴文が「朝鮮人が発言をし、記事にただけでは説得力を持たないだろうと考えた。日本人自身による発言が望ましいのである。けれども、日本の学者、研究家の発言を得る手だても自身もほとんどなかった。朝鮮またはその文化は、日本歴史の一部、ないしは微細なものとして扱われているにすぎない。それを朝鮮・朝鮮文化を軸にして発言することは、たやすく受け入れられるものではないと思えた」¹⁶⁾と述べるように、朝鮮蔑視観や在日朝鮮人差別が根強い社会状況を鑑み、より幅広い読者に雑誌を読んでも

16) 鄭貴文、前掲書、191-192頁。

らうために著名な日本人知識人を主要な著者として打ち出す戦略があった。

ただし、金達寿によると、雑誌の論者を日本人主体にしたのは総連の批判をかわす意図もあったとされる。鄭兄弟は共に総連の構成員であり、特に鄭詔文は京都朝鮮高校の建設委員長、京都府朝鮮人商工会副会長、総連中央委員などを務めていた。だが、総連内部で金日成の個人崇拜が強まる1960年代後半において、個人での雑誌刊行は困難になっていた。既に、京都府に対し、府主催の市民講座における金達寿の講師依頼を取り消すように総連京都本部から圧力がかけられ、鄭貴文の『朝陽』も圧力を受け2号で廃刊となった。

そこで金達寿が総連議長に対する上申書を作成し、日本の中の朝鮮文化遺跡を明らかにするための小季刊雑誌を鄭詔文の経済的負担のもとに刊行すること、雑誌は日本人を読者とし、執筆者も著名な日本人学者を主とし、朝鮮人が表立たないようにするとの条件を提示して許可を取り付けたという¹⁷⁾。それでも創刊号が出た時点から詔文は総連京都本部に繰り返し呼び出しを受け刊行中止を求められ、総連での全ての役職を辞めさせられた他、総連の参加機関や学校に所属する鄭貴文の家族にも厳しい圧力がかかるなどの事態が起こった。以前から鄭詔文と面識があった考古学者の李進熙も、総連在籍中は名前を伏せたまま、『朝鮮文化』創刊号の座談会の司会を行い、その他にも美術品の鑑定や原稿編集などに携わっている。

こうした事態を重く見た上田正昭らは、湯川秀樹や当時立命館大学総長であった末川博などにも寄稿を依頼し、彼らのような名士も参加しているということで雑誌を守ろうとした。更に、司馬遼太郎の発案で1973年2月には東京の中央公論社ビル大ホールで「雑誌『日本のなかの朝鮮文化』を励ます会」が開かれ、180人超が出席した。祝辞には民族学者の和歌森太郎、元法政大学総長で哲学者の谷川徹三、作家の松本清張、中国文学者の竹内好、日本史研究者の井上光貞、詩人の中野重治、朝鮮史研究者の旗

田巍、アジア・アフリカ作家会議日本委員会事務局長を務めた評論家の松岡洋子、彫刻家の岡本太郎、作家の陳舜臣が立った。

このようにして刊行が続けられた『朝鮮文化』だが、創刊号から特に力を入れたのが誌上座談会の企画である¹⁸⁾。陶磁器や仏教など毎回異なるテーマが設定され、数名の参加者が討論を行う形式で計45回が雑誌に掲載されている。1979年の第1回座談会は、「日本のなかの朝鮮」という題で、金達寿、司馬遼太郎、上田正昭、村井康彦が出席し、京都大学学友会館で開かれた。この回の後半では金達寿により「帰化人」の語の使用に対する問題提起が行われ、「渡来人」表現が提案されるなど、古代史の議論を通じて近代以来の日本の朝鮮認識を変えたいとする雑誌創刊の目的が示唆されている。

また、第1号の編集後記で鄭貴文が、日本の中で手厚く守り受け継がれている朝鮮文化の遺跡を知らせたいと述べているように、地域の郷土史や芸能習俗の中に残る朝鮮文化の痕跡を発掘することがもう一つの雑誌の目的であった。

更に、朝鮮文化社の主催で、公開シンポジウムや月1回の文化講座、「執筆者と読者のつどい」など、専門の歴史研究者や著名な知識人と一般読者が交流できる機会を様々に設けた点は興味深い。特に1972年からは「日本のなかの朝鮮文化遺跡めぐり」と題したツアー企画を始め、第1回目の「河内飛鳥への旅」には定員100名に対して500人以上の申し込みがあるなど人気を博した。ツアーは、臨地講師の金達寿や上田正昭と共に、一般参加者が日本各地の朝鮮関連史跡と一緒に巡るもので、場所によっては地元の教育委員会や郷土史家らとにシンポジウムも開かれた。ツアーは年に2～3回開催され、その後10年近く続いた。

3 誰が・なぜ『朝鮮文化』を読んだか

前述の「雑誌『日本のなかの朝鮮文化』を励ます

17) 金達寿『わが文学と生活』、青丘文化社、1998年、257頁。

18) 全50号のうち、28号、32号、41号、46号、48号は座談会が掲載されていない代わりに、朝鮮文化社主催の公開シンポジウムの発言録が掲載されている。

会」で、挨拶に立った竹内好は『朝鮮文化』を「日本で一番革命的な雑誌」と評した。この節では、『朝鮮文化』関係者の発言や、第2号から第16号までの「通信」欄に掲載された全63通の読者からの投書を参考に、この雑誌に対する読者の動機や視点を拾い上げつつ、1970年代当時の日本社会において『朝鮮文化』のいかなる部分が「革命的」であったかを考察したい。なお、引用にあたっては、投稿者の名前は伏せ、住所、性別、職業のみを記載した。

まず、「通信」全体を通じて多く見られるのが、在日朝鮮人読者やその近親者からの投書であり、日本国内で生活する自身や子供世代が朝鮮に関する歴史文化を学ぶ教材として雑誌を購読している様子が書かれている。

朝鮮人であるわたしたち2世、3世は朝鮮のことを何一つ知りません。今までわたしが探していたものを探しあてたという思いです。わたしは日本生まれの一朝鮮人主婦です。三号まで出たそうですが、一日も早く送って下さい。(京都市左京区・女性)¹⁹⁾

わたしの主人も朝鮮人で現在東京で印刷の仕事をしております。子供も学齢期を控え教育のことなどで主人と意見が合わず口論となることもしばしばですが、日本人のなかで朝鮮人としての誇りをいかにして持ちつづけ、前向きに生きていくか、現在でもなかなかむずかしいようです。(中略)「朝鮮文化」を一緒に勉強したいと思います。(千葉県市川市・主婦・女性)²⁰⁾

あるいは、『朝鮮文化』の読者には、戦前に植民地朝鮮で生まれ育った世代も少なくなく、日本人でありながら「朝鮮」に寄せる親近感や郷愁から、古代日朝関係史の学習へと関心を寄せた読者もいた。

短期間ではありましたが、小学生のころ朝鮮人の有人と親しく交わり、姉夫婦が長く清津〔筆者注：

現在の咸鏡北道清津市〕に生活し、わたし自身4年間清津におったこと、また日本の上代史にしめる朝鮮文化の圧倒的位置、現在親交する在日朝鮮人の友人など、わたしのなかにおける「朝鮮」は血肉的な存在であることを感じないではおられません。朝鮮および朝鮮人と日本および日本人との深い関係についての知識となれば実に貧弱きわまりない次第ですので、今後「日本のなかの朝鮮文化」を通じて知識を得てゆきたいと思います。(京都市東山区・男性)²¹⁾

更に、学生や中高年問わず様々な読者から寄せられたものとして、日本社会における民族差別の問題や、日本人としての自己の有り様を批判的に述べた内容が多い。とりわけ、以下の1つ目のような学校教師からの投書が複数掲載されており、1970年代当時関西地域の公立学校で在日朝鮮人生徒向けの民族教育が課題となっていたなかで、『朝鮮文化』を教材として活用する試みが伺える。

中学時代(今は連絡がとだえてしまいましたが)朝鮮人の友達についても、こちらはまったく友達のつもりでいたものが「あなたには私達の気持ちは絶対わからない」といわれたことが今になって痛くつきさります。とにかく朝鮮と日本について知りたいということ、学校の中に必ず何人かいる朝鮮人の子供。差別を重く背負い、なかには暗く卑屈になった子供に、人間としての自覚と朝鮮人としての誇りをわたしの小さな力のなかから少しでも育てられたらと思っております。(中略)「日本のなかの朝鮮文化」をできれば学校の青年部のなかなどで広めたいと考えます。(大阪府八尾市・小学校教員・女性)²²⁾

九州の片田舎から上京して、ブロック職人をしています。私の友人の知人に朝鮮の青年がおりますが、私は彼の前で「朝鮮」という言葉が言えな

19)『日本のなかの朝鮮文化』4号、朝鮮文化社、1969年、58頁。
20)『日本のなかの朝鮮文化』8号、朝鮮文化社、1970年、66頁。

21)『日本のなかの朝鮮文化』5号、朝鮮文化社、1970年、58頁。
22)『日本のなかの朝鮮文化』第8号、朝鮮文化社、1970年、66頁。

いのです。私は差別などということには反対ですし、はずべきことだということも知っているつもりです。にもかかわらず、なぜ「朝鮮」という言葉が言えないのか、考えこんでしまいます。朝鮮について何も知らないというより知ろうとしなかった、無知のかげにかくれて沈黙し続けて来た私が「朝鮮」という言葉の発音にとまどうのはむしろ当然のことかもしれません。日本人としての自分を知り、そして同じ年代の朝鮮青年がなぜ私の目の前に居るかを知るために話をし、ききたいと思っています。(東京都新宿区・工具・男性)²³⁾

朝鮮文化というものがどのようにして日本文化の下地を築いたかというようなことは、本を読むことによって知識を得て来ましたが、やはり多少の偏見と差別感がつきまといっていました。これはコミュニケーションの場がなかったからです。朝鮮人が奥深くもっているのを知る機会がまったくなかったわけですが、こんどのような「朝鮮遺跡めぐり」に参加することで、道々いろいろ話し合うことが出来ました。わずかでも直接朝鮮人との心のふれ合いを持つことが出来たことはうれしかぎりです。(京都市左京区・女性)²⁴⁾

以上のような古代日朝関係史の学びを現代の民族差別問題と結びつけた投書を見ると、雑誌を通じて、在日朝鮮人の自己回復や日本人との相互理解を促すという鄭兄弟の目論見はある程度当たったように思われる。一方で、『朝鮮文化』は専門の歴史研究者のみならず、在野の歴史家や一般の人々も加わった掘り起こしを重視する姿勢をとったこともあり、全国各地の古美術の愛好家や、独自に日朝関係史の調査を行ってきた郷土史家などから寄せられた史料の情報提供やアイデアも「通信」欄で数多く紹介されている。『朝鮮文化』が、専門家やアマチュアの枠を超え、いわば「市民主体」で古代史を自由に論じ

る場を提供したことは、戦後の歴史学と大衆の関わりを考える上でも重要な意味を持つ。

そもそも、戦前の非実証主義的で国家主義的な歴史学への反省に立ち、実証史学やマルクス主義史学によって牽引された日本の戦後歴史学は、それまで出来なかった新たな歴史研究を通じて、いわゆる「皇国史観」の克服を試みていった。その過程で、それまで見落とされてきた民衆史・地域史の見直しや、朝鮮半島を含むアジアの視点からの実証的な日本史研究を志向する歴史研究も登場していくことになる。

古代史をめぐる、戦後の学界や社会に大きな衝撃を与えたのが、考古学者の江上波夫が1948年に提唱した「騎馬民族征服王朝説」であった。これは、北方アジアの遊牧民族が朝鮮半島南部を支配した後に日本列島に侵攻し、大和朝廷を開いたことを唱えたもので、一国史を超えた東アジアの視点から古代日本の成立に迫る大胆な仮説としてセンセーショナルに取り上げられた。この仮説については、発表当時より、専門家からは裏付ける根拠が乏しいとして厳しい批判や疑問が提起された一方で、手塚治虫や司馬遼太郎などの著名作家や一般の古代史ファンからは熱心に支持され、メディアでも盛んに取り上げられた。

とりわけ、長らく戦前の歴史教育を受けた世代の人々にしてみれば、天皇の祖先を大陸由来とする江上の仮説は、彼らが学んできた建国神話を合理的に説明し、かつ日本(人)と大陸との歴史的な関わりを裏付ける壮大な歴史ロマンとして受け止められた。また、総連を脱退した李進熙が1972年に『広開土王陵碑の研究』(吉川弘文館)を出版し、日本陸軍参謀本部が高句麗王の功績を記した碑文を、古代における「神功皇后の三韓征伐」を裏付ける内容に改竄したとする学説を提起し、こちらも学界内外で大きな論争を呼んだことで、権力者によって意図的に「朝鮮」の存在を隠蔽、あるいは歪曲してきた日本古代史の「真実」に社会的な関心が寄せられることとなった²⁵⁾。

たとえば、『朝鮮文化』1号の座談会における金達寿と司馬の発言を以下に見てみよう。

23) 『日本のなかの朝鮮文化』第9号、朝鮮文化社、1971年、66頁。

24) 『日本のなかの朝鮮文化』第15号、朝鮮文化社、1972年、66頁。

（金達寿）ずっと古代から、たとえば秀吉のそれにしても、彼等の意識の底には、自身、意識するとしないうにかかわらず、つねに朝鮮はかつてのおのれの出身の地、故地だということがあるように思う。ですから、たとえば秀吉はああして天下を統一したけれども、しかし、朝鮮がそのままあっては、まだ、全体をその手におさめたという気持ちになれない。どうも、安定しない。このことについては、（中略）これは彼らの分家意識、つまり、本家に対するコンプレックスだということです

（司馬）これは学問的な話じゃないですが、ちょっとした感覚的なことなんです。イメージとして朝鮮人と日本人は同じだと思いませんか。つまり言葉をかえていいますと、日本人の血の中に朝鮮人の血が40%入っている。あるいは60%は入っている。もしくはもともと同じだと。『日韓同祖論』というのが昔ありましたが、学問的にそんなこというんじゃないくて、感覚的にどう思いますか。ぼくはどうも両地域の間人どもは同じ種族のように思いますがね。²⁶⁾

上記の会話では、豊臣秀吉の朝鮮出兵を引き合いに出しながら、日本人の朝鮮に対する感情を、「故国」および「本家」に対する「分家意識」とする金達寿の説明に同調する形で、日本人と朝鮮人は実質的に「同じ種族」であり、かつては西日本を中心に日本各地の人々が自らを朝鮮渡来と自認していたとする司馬の発言が続き、国家成立以前の人の移動から東アジアの古代史を捉えようとする議論が展開される。司馬自身が触れたように、日本人と朝鮮人の同質性を強調した「日韓同祖論」は日本による朝鮮の植民地支配を正当化する根拠として用いられたものであ

るが、ここでの会話では、日本と朝鮮の優位性を倒置させた同様の言説が肯定的に述べられていることに注意したい。血統や文化から見た日本と朝鮮の同質性を前提とする言説は、以下のような読者からの投書の中にもいくつか見られる。

私が日本の古代に興味を持ったのは、御誌を読み始めてからです。これまで小・中・高を通じて皇国史観による教えを受け、又それをうたがう事もなく今日まで過して来た事を、大いに反省させられました。古代の日本は、朝鮮という国を抜きにしては考えられないと言うか、古代日本を語ることは即ち朝鮮を語る事でもあると思わずにはいられません。日本よりもはるかに高度の文化を持った朝鮮であったのに現在の日本と朝鮮の深い隘路を悲しまずにはいられません。（東京都新宿区・女性）²⁷⁾

わたしは全くの素人ながら考古学に深い興味を持つものです。日本古代の真の歴史を残す研究すればするほど、知らされなかった部分の深く大きいことがわかります。日本の皇室はもとより日本人の祖先の血のなかには非常に多くの朝鮮の血が混っていることを学びました。とくにわたしの住んでいる兵庫県には朝鮮系氏族が広く住んでいたことが考証されております。空虚な言葉の羅列よりは真の日本古代史を学ぶことの大切さを痛感します。（神戸市灘区・男性）²⁸⁾

「皇国史観」への挑戦が試みられる一方で、「明治百年」となる1968年を前後して、建国記念日の制定（1966年12月）や、社会科授業への神話や伝承の導入を含んだ「小学校学習指導要領」の告示（1968年7月）などが政府主導で行われ、天皇制イデオロギーに基づく軍国主義への回帰を危惧する雰囲気知識人たちの間で高まった。

25) 古代史研究者の李成市は、1970年代における姜在彦および李進熙の歴史研究や言説に焦点を当て、植民地批判を根底に置いた学説の提起が日韓の学界や市民社会に影響を与えた背景を整理し、学界では見過ごされた彼らの主張が、日本の市民による絶大な支持を受け、後にメディア報道を通じて韓国市民の歴史認識にも強い影響を及ぼすようになった過程を「在日の古代史」の特徴として説明している（李成市『闘争の場としての古代史 東アジア史のゆくえ』〔岩波書店、2018年〕、同『「在日」にとって古代史とは何であったのか』〔『在日総合誌 抗路』第10号、クレイン、2022年、98-115頁〕など。）

26) 「日本のなかの朝鮮（座談会）」、『日本のなかの朝鮮文化』1号、朝鮮文化社、1969年、27頁。

27) 『日本のなかの朝鮮文化』10号、朝鮮文化社、1971年、66頁。

28) 『日本のなかの朝鮮文化』12号、朝鮮文化社、1971年、66頁。

このような中で、古代史を通じた新たな歴史観の創出を掲げる市民の運動が1970年代を通じて各地で見られた。一例として、ドイツ文学者の鈴木武樹と弁護士の後藤孝典による「日本古代文化奉賛会」(1972年設立)や、九州王朝説を提起した思想史学者の古田武彦に賛同する人々による「市民の古代研究会」(1979年)などが挙げられる。特に前者は、日本の建国神話が歴史教科書に挿入されたことに抗議し、禁止されてきた天皇陵古墳の学術調査実施を訴える市民運動として発足した²⁹⁾。

この流れを更に後押し契機となったのが、1972年3月の高松塚古墳壁画(奈良県)の発見である。「飛鳥三美人」と呼ばれる大陸風の衣装を着た女性などが描かれた極彩色壁画は、「戦後最大の考古学的発見」としてメディアでも盛んに報じられ、古代日本と大陸の交流を裏付けるものとして、連日多くの人々が古墳のある明日香村を訪れるなど、「古代史ブーム」の起点ともなった。同年10月には、文化庁の招聘で日本・韓国・北朝鮮の研究者による初の合同学術調査と共同記者会見が現地で実施された。

『朝鮮文化』の編集実務を担当した松本良子は、高松塚壁画古墳発見を境に雑誌の読者が増え、遺跡めぐりツアーにも大勢参加したと振り返る³⁰⁾。また、古墳発見を受け、「日本古代文化奉賛会」の鈴木武樹らは、新たに江上波夫を会長に迎え「東アジアの古代文化を考える会」を1972年に発足させた。鈴木らは、金達寿や鄭兄弟、李進熙などとも面識があり、専門家と市民が一緒になった古代史講座や遺跡めぐりツアーなど『朝鮮文化』を手本にした企画を実施し、金達寿や上田正昭らも講師として招いているほか、鈴木自身も『朝鮮文化』13、19号に寄稿している。

加えて、1970年代における消費社会の到来や日本の国際化もブームを後押しした重要な背景要因として考えられる。高松塚壁画古墳に多くの人々が押し

寄せた現象を振り返り、朝鮮史研究者の井上秀雄は、安保闘争を始めとする1960年代の政治運動の挫折、国民生活の安定と海外旅行ブーム、考古学・言語学などの生活文化の研究により古代史が多くの人々に開放されたことを時代背景に挙げ、こうした文化活動は地道な研究とは逸脱した遊戯的な要素がある一方、明治以来忘れられていたアジアへの関心と知識を広く国民全般に浸透させたと述べている³¹⁾。

確かに、1960年代から70年代にかけての日本国内は、東京オリンピックや大阪万博の開催、海外個人旅行の解禁、沖縄返還、韓国や中国との国交正常化などが相次ぎ、国際社会の中における日本の位相が大きく変化した時期でもあった。この時、高度経済成長を成し遂げた日本社会の実態や企業文化、日本人の精神構造を分析する「日本文化論」が流行したことも、『朝鮮文化』が読まれた要因として挙げられている³²⁾。また経済成長と結びつく形で、急速な都市の開発に加え、雑誌やテレビを始めとするマスメディアの発展、交通網の全国的な発達も起こった。その過程で、司馬遼太郎作品をはじめ「歴史」を題材にした大衆小説が相次いで刊行・メディア化され、通勤の合間の娯楽や、組織論やリーダーシップに通じる修養を求めるサラリーマンを中心に、大衆に絶大な人気を博した³³⁾。

人間生活における物質的な豊かさは、精神的な余裕とある程度直結する。司馬遼太郎の主な読者や、『朝鮮文化』の遺跡めぐり参加者の大部分が戦前生まれの日本人中高年層であったように、食うや食わずの生活から解放されて初めて、多くの人々は「歴史」という過去に目を向け、様々なメディアを介して娯楽として消費する余裕を獲得した。3号の「通信」では、「実におもしろく、ためになり、意欲的で、学問的思考をよびおこします。わたしは心身が疲れると——とくに集中的に仕事をしたあとなど——古代史関係書を読みふけてリクリエイトする道楽を

29) 鈴木武樹「歴史の本質をさぐる市民たち 『東アジアの古代文化を考える会』の一年」『朝日ジャーナル』15(49)、1973年、83-88頁。

30) 松本良子「『日本のなかの朝鮮文化』の十三年」、『季刊三千里』50号、三千里社、1987年、222頁。

31) 井上秀雄「高松塚壁画発見から十年」、『季刊三千里』29号、三千里社、1982年、29-37頁。

32) 廣瀬、前掲書、304頁。

33) 福岡良明『司馬遼太郎の時代 歴史と大衆教養主義』(中央公論社、2022年)を参照。

もっており、4月以来そういう道楽にふけりつづけているものですから一層楽しく読めました」³⁴⁾と千葉県在住の男性の投書が紹介されている。

言い換えれば、1970年代の社会状況は、歴史の「大衆化」を促しただけでなく、戦後の日本人の行動範囲や関心が、それまで周縁に置かれてきた国内の地方やアジア諸国へと広がることを可能にし、その過程で「日本（人）とは何か」という問いが繰り返し論じられた。大都市の多くで開発が進み、人口増加や公害の問題に直面する中、各地に残る古来の遺跡や昔ながらの自然、伝統文化、郷土史などに関心を向け、自ら学んだり実際に足を運んだりする行為は、自分たちが知らなかった、あるいは経済成長の中で見失ってしまった「日本」の「再発見」にも通じる³⁵⁾。そして、最も近い朝鮮半島を始め、アジア諸国と日本のルーツを関連付ける言説もまた、戦前から引き継いできた「日本（人）」の定義を再構築すると共に、大陸との歴史的繋がりや連帯を裏付けたり、戦前のアジアを知る人々のノスタルジーを刺激したりするものとして受け止められた。そうした文脈を踏まえるとき、古代日本と朝鮮半島の関わりについて、専門家・非専門家の協働を通じて、様々な地域に残る歴史文化の中から掘り起こし、支配者の視点からではない新たな歴史像を提起しようとした『朝鮮文化』は「革命的」であったと言えるだろう。

おわりに

以上、本稿では、季刊雑誌『日本のなかの朝鮮文化』を手がかりに、1970年代を中心とする日本社会で起こった日朝古代史をめぐる歴史実践の様相について描写してきた。

34) 『日本のなかの朝鮮文化』3号、朝鮮文化社、1969年、58頁。

35) 1970年から76年まで、日本国有鉄道（国鉄）が「ディスカバージャパン」キャンペーンを打ち出し、個人客が全国各地を観光で訪れる新たなライフスタイルの登場を促すと共に、高度経済成長への疑義から日本の古いものや伝統への関心が寄せられた（野村典彦「ディスカバージャパンと横溝正史ブーム」一柳廣孝編『オカルトの帝国 1970年代の日本を読む』、青弓社、2006年、60-80頁）。『朝鮮文化』が読まれた背景には、「日本」の「再発見」に対する同時代の人々の関心や消費行動とも重ね合わせて考察する必要があると考える。

『朝鮮文化』は、古代史を主題とする半学術雑誌という体裁をとったこともあり、日韓連帯運動を始め、現代の社会問題などに関する直接的な言及はほぼ見られないものの、在日朝鮮人の自己回復や日本人の朝鮮観との「対決」を目指す鄭兄弟らによって始められ、関西を中心とする日本人知識人や、日本全国の郷土史家、一般の人々の支持も受けながら刊行が続けられた。その背景には、「古代史ブーム」に象徴されるように、「日本」という国家の成り立ちをめぐる、古代史を舞台にした様々な議論が学会内外で展開された当時の状況があり、天皇制に象徴される国家中心的な歴史観の打破や、アカデミアの権威に対抗し、「市民」の手による自由な歴史研究の可能性も模索しようとする人々が存在した。また、読者投稿を見ると、差別の問題や民族教育に関心を持つ在日朝鮮人や教師たち、郷土史家、余暇の娯楽としての古代史愛好家などからも投書が寄せられており、『朝鮮文化』は、市民運動の文脈に限らない同時代の様々な人々の需要に応える恰好のプラットフォームであったことが分かった。

改めて、本稿の問いに立ち返り、『朝鮮文化』が読まれた時代における日本社会の隣国観を考察すると、2つの認識が混在していることが見えてくる。1つは、事実上の国家として存在している韓国や北朝鮮、あるいは日本社会内のエスニック・マイノリティとして生活する在日朝鮮人など、目の前に存在する現実の主体としての「朝鮮」である。その根底には、南北分断の悲劇や軍事独裁政権の支配、民族差別といった困難な現実を強いられている人々に対し、その原因を作った加害者としての「日本」を念頭に、贖罪や連帯といった目的から、歴史文化の学びを通じた「朝鮮」への接近を試みようとするものである。

もう1つは、観念としての「朝鮮」に対するまなざしである。すなわち、はるか古代における日本（人）の「本家」としての親近感や憧憬、かつての植民地としての郷愁、現存する地名や寺社仏閣などから「渡来人」の痕跡を探す知的好奇心の源泉など、1970年代の「古代史ブーム」は、現在と時空間を異にする主体としての「朝鮮」との出会いを日本人にもたらしした。

いずれにせよ、こうした朝鮮観が混在し得たのは、既に戦後30年近く経つとも、戦前の歴史教育や植民地朝鮮の記憶を引き継ぐ世代が日本社会にまだ多い上、韓国との直接交流がほぼ不可能であった1970年代特有の制約があったためと考えられる。タイトルが示すように『朝鮮文化』が論じるのは日本国内の朝鮮文化の痕跡であり、そこから導きだされるのは、「日本」の輪郭を再定義する合わせ鏡のような存在としての「朝鮮」であった。その中には、「日韓同祖論」の焼き直しにもなりかねない言説が含まれていたこともあり、戦前の日本のアジア主義が戦後にどのように引き継がれていったかという観点も含め、更なる検討が必要であろう。また、金達寿ら在日朝鮮人知識人たちが議論の多くをけん引しつつも、雑誌の執筆者と読者の大半が日本人であり、当然ながら、そこに韓国（あるいは北朝鮮）の専門家の見解や普通の人々の声が共有されることはほぼなかった。

『朝鮮文化』は1981年6月に50号で終刊する。その理由としては、当初の日本社会における「帰化人」

の呼称を改めさせる目的がある程度達成されたためとされたが、同年3月に金達寿・姜在彦・李進熙らが電撃訪韓したことをめぐって鄭詔文と絶交した出来事も影響した。そして、1980年代以降は、日本国内でも韓国の社会文化を題材にした報道や書籍が増え、民主化を契機に直接交流が拡大すると共に、歴史認識の齟齬にも直面することになる。言い換えれば、日本人はようやく生身の「朝鮮（韓国）人」と向き合う中で、1970年代までのそれとは異なる「外国」としての新たな隣国観を作り上げていくことになる。その意味では、1980年代の到来と共に『朝鮮文化』が役目を終えたのは象徴的である。今回は全50号の各記事や個別の執筆者の検討は出来ていないが、1970年代から80年代にかけての古代史をめぐる雑誌関係者の議論や言説の変遷については、今後の課題として本稿を締めくくりたい。

[付記] 本稿に関わる研究は、JSPS 科研費22KJ2254の助成を受けている。